

諦めるために逃げたのに、
お腹の子ごと溺愛されています
～イタリアでホテル王に見初められた夜～

Adria



目次

諦めるために逃げたのに、
お腹の子ごと溺愛されています
／イタリアでホテル王に見初められた夜／

書き下ろし番外編

永遠の愛を約束しよう

諦めるために逃げたのに、
お腹の子ごと溺愛されています

（イタリアでホテル王に見初められた夜）

プロローグ

「えーっと、搭乗ゲートは……」

私はイタリア旅行に行くために、自分が乗る飛行機のゲートを探した。

保安検査と出国検査を無事に通過できたものの、初の一人旅は不安のほうが大きい。

「やつぱり夏帆を誘えれば良かったかな」

不意に出た弱音にハツとして、首を横に振る。

ダメよ、美奈。海外に行つて一皮剥けた自分になるのよ！

「そうよ、あんな男忘れてやるんだから」

搭乗ゲートを見ながら、恨み言のように呟く。

そう。忘れてやるんだから……

——パアアアン！
呆然と立ち尽くしていると、部屋の中に小気味よい音が響いてハツとする。親友の夏帆が、ベッドの中で見知らぬ女といふ恋人——穂の横っ面を思いつきり引つ叩いたようだ。

今日は穂とデートの約束をしていた。が、昨日からずっと連絡が取れなかつた。電話に出てくれないし、メッセージアプリに既読もつかない。嫌な予感ばかりが脳裏をよぎつて、とうとう我慢ができなくなり夏帆に泣きつくと、穂の部屋まで一緒に様子を見にいこうと言つてくれたのだ。そして来てみれば、案の定彼は見知らぬ女と裸で寝ていた。

最近、お互い仕事が忙しくて会えていなかつたから、久しぶりのデートをすごく楽しみにしていたのに。それなのに、また浮気をしていたなんて……：

心の中にゆづくりと絶望が広がっていく。

「夏帆……。もういい。もういいわ」

「何を言つてるのよ、美奈！ あんたも殴つてやればいいわ、こんな男」
私以上に憤慨していいる親友の手を引っ張る。穂の隣では、裸の女が布団で体を隠しながら口元を手で覆つて驚いていた。私とは違う明るい茶色の巻き髪のとても綺麗な、そして派手な女性。彼はこういう女性が好みだったのかと、ほんやり見つめた。
彼の部屋で浮気相手とご対面なんて情けなさすぎて、殴る氣にもなれない。いつそ笑

い飛ばしでもすればいいのだろうか。

それに、稔の浮気は何もこれが初めてじゃない。付き合つて二年。何度裏切られたか……。そのたびに彼は「魔が差したんだ」と言つて頭を下げるのだ。

夏帆は稔の悪癖を知つていて、それでも私が不安にならぬようによつと励ましてくれていた。今日だつて「きっと大丈夫よ。風邪で倒れているだけかも。ほら、様子見に行つてあげようよ」と言つて、なかなか勇氣の出ない私についてきてくれたのだ。そんな優しい彼女に手まで上げさせたのだ。ここで稔を許したら女が廢するというもの。

「こんな男、殴る価値もないわよ……」

二人をキッと睨みつける。

言いたいことは山程あるが、さつとそれをぶつけたら泣いてしまうだろう。そんなの浮気相手の手に覆われた唇が驚きから嘲りに変わるだけだ。

それだけは……それだけは嫌だ。

言葉と一緒にこぼれてしまいそうな涙を呑み込んで、唇をキッと引き締めた。すると、稔は悪びれもせずにベッドから下りて近づいてくる。私たちに言い逃れのできない現場を見られたことも、夏帆にぶたれたこともまったく気にしていないのだろう。稔はまた私が許すと思っているかのように笑つている。そして両手を合わせて謝つてきた。「美奈、ごめんな。彼女、すげえ積極的でさ。次こそはもう絶対にしないから……！」

自分のしたことを微塵も悪いと思つていない——私を軽んじているのが分かる彼の態度に嘆息した。

——私、何でこんな人を好きになつたんだろう……

呆れた目で稔を見つめると、小首を傾げて私を見つめ返してくる。その表情が何とも言えないくらい苛立ちを誘つた。

きっと彼は、私が「もうしないでね」と言つたら、抱き締めてくるんだろう。そして「俺が本当に好きなのは美奈なんだ。だから、仲直りしよう」と言うのだ。そんなやり取りはこの二年でやり尽くした。毎度毎度、同じことの繰り返し。反省もしないし、隠す気はない。

正直なところ、こんなことを繰り返されても変わらずに好きでいられるような忍耐力は持ち合つせていない。稔への恋心なんて、とうに色褪せている。残っているのは過去の思い出と情だけだ。

そんな不毛な感情とも今日でお別れよ。

私は手を伸ばして私に触ろうとしてくる稔の手を払いのけて、きつい眼差しで睨みつけた。

「もう稔とは別れるわ！ あなたなんて大嫌い！」

そう言い放つと、隣にいた夏帆が手を叩いて「よく言つたわ」と嬉しそうな声を上げる。

稔は私の拒絶を予想もしていなかつたのだろう。ただひたすらに呆然としている。私はその場に立ち尽くす稔に彼の部屋の合鍵を突き返した。すると、受け取つてもらえなかつた鍵がガチャーンと派手な音を立てて床に落ちる。

「もういらないから返すわ。あと、この部屋にある私のものはすべて処分しておいて」「え？ 美奈？」マジで言つてる？」

「当たり前よ。こんなこと冗談では言えないわ。さようなら。二度と私の前に顔を見せないで」

私がそう言うと、稔の顔がみるみるうちに蒼白になつていく。私はそんな彼の顔を一瞥して、夏帆の手を引き、もう今後訪れることもないであろう部屋を飛び出した。

「ふつ、うう……ひつ、く」

彼の部屋を飛び出した途端、涙が止めどなくあふれてくる。すると、夏帆が抱き締めてくれた。

「美奈。あなたはとても素敵な女性よ。あんな節操なしにはもつたいないわ。だから、これで良かったのよ。今日はすごく頑張つたね」

「ごめんなさつ……、ううん、ありがとう」

私は慰めてくれる夏帆と手を繋ぎながら、稔のマンションをあとにした。稔が好きだ

と言つた長い黒髪が、涙の止まらない私の頬に纏わりつく。
〔髪、染めようかな……〕

あの女性はとても明るい茶髪だった。稔に未練があるわけではないが、気分転換に茶髪にしてみてもいい気がしたのだ。何より彼が好きだと言つた黒髪のままでいたくなかつた。

「気分転換になつていいいんじやない？ 何なら、ベタだけど髪も切つちやえば？ 今、腰くらいまであるし……」

「そうね。最近この長さで黒髪ストレートはちょっと重く感じると思つていたの。夏帆と同じ焦げ茶にして、胸くらいまで切ろうかなあ」

「嫌だ。私は焦げ茶じゃなくココアブラウンよ」

「……何が違うの？」

焦げ茶とココアブラウンの違いが分からず首を傾げる。いつのまにか涙は止まつていた。

「詳しいことは美容師さんに相談すればいいわ。ほら、予約入れて」

夏帆がそう急かすから、私はスマートフォンで、私たちの行きつけのヘアサロンの予約を取つた。

「わあ！　すごい！」
 「こんなに短くなつたの初めてだし、やっぱり雰囲気変わるね。うん、とてもよく似合つてる」

「ありがとうございます」

鏡の前で夏帆の言うココアブラウン色になつた髪を見つめる。胸くらいまでの長さになつたストレートの髪がふわりと揺れた。

長すぎた髪をぱっさり切つて、髪に色を入れたのは正解だつた。髪も心も、とても軽くなる。

「でも、本当に良かったよ。正直、すごく心配してたんだ。別れて正解だね。美奈ちゃん、明るいらしい子だから、すぐにいい人が見つかるよ」

「どうでしょうか……？」

「うん。気分転換に旅行でも行つてみたら？　もうすぐお盆休みなんだよね？　新しい出会いがあるかもしれないよ」

そう言つてウインクした美容師の一ノ瀬いちのせさんの背中を叩く。

「もう。そんな簡単に出会いなんて落ちてませんよ。それに、恋はしばらくいいかなあ。今は一人の時間を楽しみたいです」

稔と付き合つている時は、彼の部屋の掃除をしなければならなかつた。それに毎日お弁当を作つてほしいと頼まれていたので、せつせと早起きしては彼の会社の近くで待ち合わせして渡していたのだ。それがなくなつただけでも、すごく楽だ。もう早起きする必要がないし、彼の部屋の掃除をする必要もない。その時間を使って、何かを始めてみてもいいかもしない。

「それなら尚更、旅行はおすすめだよ。いつもと違う場所で羽を伸ばしたら、きっと嫌なことも全部どこかに飛んでいくよ」

「ありがとうございます。そうします」

「目一杯楽しんで」

微笑んでペコリと頭を下げる、一ノ瀬さんが微笑み返してくれる。

私はその足で、ガイドブックを探すために本屋へ向かつた。

「うーん。せつかく行くなら海外がいいからしら。

日本との違いをこの目で見れば、一気に視野が広がり今後の自分を変えるきっかけになるかもしれない。たくさんの国のがいドブックが並ぶ棚を見ながら、私はまだ見ぬ地へ思いを馳せた。

「やっぱりイタリアにしようかしら。イタリア語なら少し分かるし……」

昔、テレビで見た旅番組で憧れてから、いつかイタリアに行つてみたいと思っていた。イタリア語教室に通つて、旅行に行けるくらいの語学力は身につけたのだが、結局ずっと行けないままだった。

旅行一つでも自分で行動しないとダメなのよね。行きたいと思っていても、考へているだけでは日々はあつという間に過ぎていく。イタリアに行きたいなら、行動しなければならないのだ。

「どこにしようかな。イタリアは見所がいっぱいあって悩む……。うーん、あ！ このマリア様の写真綺麗！ 自分の目で見てみたいかも」

私はガイドブックに掲載されているミラノ大聖堂のシンボル——黄金のマリア像に目を奪われた。

——この時の私はマリア像への一目惚れで選んだ旅先で、まさかあんなことが起ころなんて思いもしなかつた……

1

「ここがミラノ……」

失恋の痛みもどこかに飛んでいきそうな気分が上がる可愛らしいワンピースに身を包み、私は感動に打ち震えながらミラノ・マルペンサ空港に降り立つた。そして胸一杯に思いつきミラノの空気を吸い込む。

ふふ。一人での旅行は不安だつたけど、無事に着いて良かつたわ。心配性な親友が海外旅行時の注意点をあれこれと言つてくるせいで不安だつたが、問題なく入国審査も終えられたし、先行きは明るい。私はほくそ笑みながら、電車とバスの料金を調べるためにスマートフォンを取り出して検索ページを開いた。一人旅は何があるか分からぬし、出来る限り費用は抑えたい。

ホテルまでの行き方は……えっと、あ！ バスのほうが安い！

私はバスにしようと決め、視線を上のほうに向ける。そしてバス乗り場の場所を案内表示で確認した。

「税関を出て左……」

案内表示を見ながら、一人でブツブツ^{ぶぶつ}歩きながら進む。すると、かなり歩いたなと思いつめた頃にチケット売り場が見えてきた。その瞬間、並んでいるたくさんの人を見て思わずげんなりする。

「やつちやつた。こんなことなら事前に予約購入しておけば良かった……つきやあ！」

トホホと肩を落とし列に並ぼうとすると、目の前で突然おばあさんが転んだ。

「大丈夫ですか？」

荷物を放り出して駆け寄り、たどたどしいイタリア語で話しかける。おばあさんは小さく頷いて、「ありがとう」と言いながら笑ってくれた。その様子を見て、ホッと息を吐く。良かつた。怪我はしていないようね。

ニコッと微笑み、一緒に鞄からこぼれ落ちてしまつた荷物を拾う。よろけるおばあさんを支え立ち上がりると、彼女が申し訳なさそうに地図を見せてきた。

「迷惑ばかりかけてごめんね……。このターミナルに行きたいんだけど、どうやって行けばいいか分かる？」

「いえいえ。迷惑だなんてそんなことありません。困った時はお互い様ですから。えつと、それは……」

あ、ここさつき私がいたターミナルだ。

空港内の地図を見せてもらいながら歩いてきた道を思い出し、慣れないイタリア語でなんとか説明する。

おばあさんは何度も「ありがとう」と言って頭を下げながら、目的のターミナルへ向かつた。その背中を笑顔で見送り、胸を撫で下ろす。良かつた。さて、バスのチケット買わなきや……

そう思つて振り返ろうとすると、誰かに袖口を引っ張られて、体が傾いた。

「え？」

「ママどこ？」

「……えつ!?」

「大丈夫だよ」

引っ張られたほうに視線を向けると、泣き腫らした顔の男の子が立つていた。

ど、どうしよう。迷子センターとかあるのかな？

「一緒にママ^{さが}捜そつか」

「……うん」

「じゃあ、荷物取つてくるから待つてね」

そう言つて男の子から顔を上げて立ち上がつた瞬間、ハツとする。先ほど自分が荷物を放り出した場所には何もなかつた。

——え？

キヨロキヨロと辺りを見回しても何もない。

「ここにあつた荷物知りませんか？」

「さあ、分からぬわ」

近くの人に訊ねてみてもこんな返事しか返つてこない。

え？ まさか盗まれたってこと？ 本当に……？

血の気が引いていく。私が立ち尽くしていると、男の子が私の手を引っ張った。

「ねえ、ママは？」

「あ……。ちょっと待つててね」

どうしよう。

目の前には泣いている子供。背後には何もなくなってしまった空港の床が見えるのみ。冷や汗がだらだらと止まらなかつた。

とりあえず、優先すべきはママを見つけてあげることよね？ 私も不安だけど、きっとこの子のほうが不安に違いない。なくなつた荷物はあとで空港のスタッフにお願いをして一緒に探してもらえばいい。そう決めて、泣きたい気持ちを堪え、その子の手を握つた。

「ごめんね、ママさが搜さがそう」

「とんだお人好しだね」

手を繋いで歩き出そうとした途端、溜息混じりの流暢な日本語りゅうしやうごが聞こえてくる。その声にハツとして振り返ると、栗色の髪にブラウンの瞳の彫りの深い男性が立つていた。キリッとして凛々しく、スーツの上からでも筋肉質だと分かる彼に一瞬で目を奪われ

てしまう。

「かつこいい…………」まるで俳優さんみたい……！

私が見惚れないと、その男性はやれやれと肩を竦めて呆れた仕草をする。

「ここは日本じゃないんだ。地面に荷物を置いた時点で盗まれると思ったはうがいい」「えつ……？」

「人助けは結構だが、もう少し自分のことも考えないと、日本に帰るまでに路頭に迷っちゃうよ。君もその子のように困ったことがあるなら、助けてと人を頼つていいんだよ」そう言つて、私の頭をポンポンと撫でる。その気遣つてくれる優しい聲音と言葉に、思わず涙がズワッとあふれ出した。

「あ、あれ、私……！」

自分が思つている以上に不安だったのか、相手は初対面だというのに向けてもらえた気遣いに堪えていたものが決壊して涙が止まらない。彼は、突然泣き出した私を見てギョッとしている。その姿を見ても涙が止まらず、私は涙を拭ぬぐいながら、「ごめんなさい」と頭を下げた。

「いや、僕のほうこそすまない。きつく言いすぎたかい？」

「い、いいえ。私、とても不安で。でも泣いている子を放り出して、荷物をさが探しに行くなんてできなくて……」

「荷物は部下にすぐ追いかけさせたから、心配しなくとも取り返してくるだろう。それから、その子のママもこちらで捜させよう」「え……？　あ、ありがとうございます！」

そう言つて、後ろにいた部下の人に何か指示を出して、彼は恭しく私の手を取つた。そしてすらりとした長身を屈め、手の甲に軽くキスを落とす。

海外では普通のことかもしれないが、そのキスで顔にボッと火がついた。

「泣かせたお詫びに、お茶でもご馳走させてくれないかな。お茶を飲んでいるうちに、君の荷物も戻つてくるだろうし」

「え？　でも……！」

そんなの申し訳ない。彼の申し出を受けるべきか逡巡しうんじゅんしていると、彼はウインクして名刺を渡してくれた。

「僕はテオフィロ・ミネルヴィイーノ。怪しい者じゃないよ。どうか気軽にテオと呼んでほしい」

「よろしくお願ひします、テオさん。私は清瀬美奈です。きよせミナと呼んでください」「おお！　よろしくね、ミーナ！」

自己紹介をしながら受け取つた名刺に目を通すと、そこには彼の名前と勤務先のホテルの名前が書かれていた。

トリエステホテル……

そのホテルの名前を見て体がわななく。

日本にもある高級ホテルだ……！　テオさん、こんな高級ホテルで働いているの？

なんだかすごい！

「自己紹介も終わつたし、ミーナも僕が怪しい者じゃないって分かつただろ？　だから、お茶をご馳走させてくれないかな？」

「はい。あ！　えっと、先に予約しているホテルに連絡してもいいですか？」

「もちろん」

私はペコリと頭を下げて、ポケットからスマートフォンを取り出した。

これだけは鞄に入れてなくて良かつた。

ホツと息を吐きながら、予約しているホテルに電話をかける。

「……え？」

電話口からは予想もしていない言葉が聞こえてきて、目の前が真っ暗になつた。

今、予約取れてないって言つた？　いやいや、まさか。イタリア語に不慣れだから、きっと聞き間違えたんだ。そう思い、しどろもどろになりながら何度も何度確認しても、予約が取れていないとしか聞こえない。

「う、うそ！　あ、あの……私……」

通話の途中なのに硬直していると、私の手からスッとスマートフォンが奪われる。テ

オさんが電話を代わってくれた。

そしてしばらく話したあと、彼は残念そうに電話を切った。

「どうやら何かのミスがあつたようで予約が取れていないみたいなんだ。でも満室らしく、新しく予約を取るのは無理らしい」

「……そ、そんな」

「私、ここに五泊する予定だつたのに……！」

これからどうすればいいの？ 出発前にもつとちゃんと確認すれば良かった……手足が急速に冷えていく。唇をギュッと噛むと、テオさんが私の肩に手を置いた。

「そんな顔しないで、ミーナ。僕のホテルに泊まればいいよ」

「え……」

「是非この旅行を華のあるものにさせてくれないかい？ イタリアは悪いことばかりじゃないと教えてあげるよ。それに君は一人にすると、また何かをやらかしそうで心配だ。僕の心の平穏のためにも、どうか僕のホテルに来てくれないかい？ 滞在中は僕が君のバトラーになるよ。『おもてなし』をさせてほしいんだ」

「え……？ エ？ テオさんのホテル？ テオさんが働いているホテルって……

「無理です！ そんな高いホテルになんて泊ません」

「僕が提案したんだから費用のことは気にしなくていい。泣かせたお詫びだと思つてくれ。ミーナ、君は今から僕のゲストだ。ゲストであるからには、先ほどのように一人で悩み解決しなくてはならないことなど何一つない」

彼は優しい。だけど、会つたばかりの人について行つて大丈夫なの？ けれど、彼の提案に乗らなければ、帰りのチケットまでの期間——ミラノでどう過ごしていいか分からぬ。

私の語学力で新しくホテル探しなんてできるの？ それにもし今日泊まるホテルすら見つけられなかつたら？

そんなことになつたら着いたばかりなのに日本に帰らなきやいけなくなる。それだけは嫌だ。

せっかく今後の自分を変えるきっかけになればと思つてここまで来たのに……。それに憧れのイタリアの地を一步も踏まずに帰るなんてありえない。

海外で見知らぬ人の手を取る。それがどんなに危険なことか分かつて。それでも私はテオさんが悪い人だとはどうしても思えなかつた。

私は葛藤しながらも自分の直感に従つて、彼の提案を受け入れた。すると、彼はエスコートするかのように腕を差し出す。その腕におずおずと手を絡めると、彼が「モルトベーネ」と言つて褒めてくれる。

どうしよう、なんだか思つてもみない始まりになっちゃつた。
空港に着いた時は、普通の一人旅が待つてゐると思つてゐたのに……！

「ほら、もう市内に入つたよ」

「え？」

「空港から車で三十分くらいだからね。すぐだよ」

そう言つて、テオさんが私の頬をつつく。

ド庶民の私でも知つてゐるイタリアの高級車。しかも運転手つき。そんな車に乗せられ、ビビつてゐるうちに市内へと入つたので、正直なところあつという間に感じてしまつた。テオさんの言葉で視線をミラノの街並みに移すと、ほどなくして目的地のホテルが見えてくる。私は口をポカンと開けて、車の窓から見えるその五つ星ホテルを眺めた。

ここがトリエステホテル……

日本にもあるのでもちろん存在は知つていたが、自分のような庶民には一生縁がないと思っていた。まさかそこに訪れる日が来るなんて。それも宿泊できるとは、人生何が起きるか分からぬものだ。私はやや複雑な心境で、テオさんの顔を見つめた。

「どうぞ」「は、はい」

ホテルに着き車が停まると、ドアマンの男性がにこやかに車のドアを開けてくれたので、テオさんがさつと降りる。そして私に手を差し出してくれた。ゴクリと息を呑み、その手を取ると柔らかく微笑んでくれる。

なんだかお金持ちのお嬢様になつたみたい。

こんな扱いを受けた経験がない私は、口から心臓が飛び出しそうなくらいドキドキして、車から降りると、若いボーターが飛んできて、荷物を下ろして運んでくれる。そこには私の荷物があつた。

あ！ 私の荷物！ 見つかつたのね……！

荷物を見ながら立ち止まつていると、テオさんが背中をさすってくれる。

「ミーナ、荷物は約束通り取り返してきましたよ。何もなくなつてはいないとは思うけど、念のためにあとで確認しようか」「はい。ありがとうございます」
自分の荷物が戻つてきただことに、まずは安心してホッと胸を撫で下ろす。
一人だつたら、きっと今頃途方に暮れていただろう。無事に見つかつて本当に良かつた。これもテオさんのおかげね。

やつぱりテオさんはいい人だったのだと直感が確信に変わった。

「わあ、すごい！」

テオさんエスコートのもと、ホテルの中に入ると、思わず感嘆の声が漏れた。お行儀が悪いと思いつつも、キヨロキヨロしてしまう。

踏み込んだエントランスホールは広々としており、宮殿と見紛うほど豪奢で美しかった。あっちを向いても、こっちを向いても煌びやかで、何かしらが金色だ。私はそのまましさに目が眩みそうだった。

「なんだか緊張しちゃいます。とても素敵……！」

テオさんに手を引かれ、ふかふかの大きなソファーに腰掛けながら、私は初めて訪れる五つ星ホテルに心が浮き立つた。

置かれていた椅子もテーブルも、今座っているこのソファーも、素人目で見ても素晴らしい逸品だということが分かる。

「ミーナは可愛いね」

私が浮かんでいると、テオさんがそう言って目を細めて笑う。

あ……私……はしたなかつたよね。

「すみません。浮かれすぎですよね……」

「違うんだ、そんな顔しないで。気分を害したかい？」見るものすべてに目を輝かせて

いる君はとても可愛く魅力的だと言いたかつたんだ」「くくくっ！」

テオさんのストレートな褒め言葉に、顔にボツと火がつく。熱くなつた頬を両手で覆うと、ベルマンが目の前にウエルカムドリンクを置いてくれたので、気持ちを落ち着かせるために一口飲んだ。

ここはイタリアよ。少しの贅辞くらいで動搖しちゃダメ。落ち着くのよ、私。……」こんなふうに褒められたのは久しぶりだから、やつぱり動搖しちゃうのよね。

「あ、美味しい」

「それは良かった。ミーナ、チェックインするためにパスポートを見せてもらうよ」「はい」

私が頷くと、彼が私の代わりにチェックインの手続きを行なつてくれる。私はそれを見ながら、ドリンクをもう一口飲んだ。

「え？ ミーナ、二十三歳なの？」てつきり、もう少し若いと思つてた

「彼は私のパスポートを見て目を瞬かせ、私とパスポートを見比べる。その意外そうなものを見る目が少し居心地悪く感じて、私は彼の視線から逃れるように俯いた。

そりや年齢より幼く見られても仕方がない。彼にとつては、母親とはぐれて泣いていた

男の子と私、どちらも大して変わらないのだろう。もしかすると私のことも迷子を保護したように思つてゐるのかもしれない。

「そ、そういうテオさんは、おいくつなんですか？」

「僕？ 僕は三十歳だよ。ミーナからすると、おじさんに見えるかな？」

「いいえ。そんなことありません！」 テオさんはとても素敵です！」

あははと笑うテオさんに力一杯首を横に振ると、彼は私の勢いに一瞬驚いた顔をした。でもすぐに「ありがとうございます」と微笑んでくれる。

私ったら、力むようなことじゃなかつたわ。恥ずかしい。でも本当にとても素敵なんだもん。

私は熱くなつた頬を押さえた。

その後は部屋へ移動し、テオさんから設備やルームサービスについての説明を受ける。さすが、高級ホテル。部屋の中もすごい。それにベッドも大きくてふかふかだ。でも覚悟したほどゴージャスで派手ではなかつたので、少しホッとした。

良かつた。これなら落ち着けそう。

「ごめんね、ミーナ」

「え？」

「はい！」

「もっといい部屋を用意したかったんだけど、今はバカンスシーズンでこの部屋しか空いていなかつたんだ」
 「謝らないでください！ このお部屋もとても立派ですし、私にはもつたいないくらいです。それに豪華すぎても落ち着かないの？」

「そう？」

「はい！」

テオさんの言葉に力一杯頷く。

というより、バカンスシーズンに部屋が空いていただけでも奇跡だ。それにこんな素晴らしいホテルに泊まるという経験をさせてもらえるだけで、とても幸せだ。

「なら、いいんだけど。じゃあ、荷物の確認をしようか？」
 テオさんは申し訳なさそうに、ページボーアイが部屋まで運んでくれた荷物を私の前に差し出した。スーツケースを開き、一つずつ丁寧に確認していく。

「良かつた……。全部あります」

「そう？ それは良かった。でも、もし足りないものとか出できたら、いつでも言つてね。すぐに用意させるから」
 「ありがとうございます。でも大丈夫なので、お気持ちはだけ受け取らせてください」
 「……ミーナ。遠慮は美德かもしれないけど、困った時はちゃんと隠さずに言うんだよ」

「はい……」

私が頷くと、彼は「モルトベーネ」と言つて、また褒めてくれる。その優しい笑顔にふにやっと笑つた。テオさんに褒めてもらえると、なんだか嬉しい。

「ミーナ、コーヒーと紅茶どっちの気分？」

照れ笑いをしながら広げた荷物を片づけていると、テオさんが問いかけてくれる。

「それは私がするので、テオさんは座つていてください」

「ダメだよ。ミーナはゲストだって言つただろう。ほら、どっち飲みたい？」

「えっと、じゃあ紅茶で」

「OK！」

ウインクして私の申し出をスマートに^{かわ}躲す彼に戸惑つている間にも、彼は手際よく口

イヤルミルクティーを淹^いしてくれる。

「さて、じゃあそろそろゆつくり過ごして」
彼はテーブルに一人分のミルクティーを置くと、そう言つて部屋を出ようとした。そ

の言葉に私は思わず首を傾げて尋ねた。

「え？ 一緒に飲まないんですか？」

「今日は色々あつて疲れただろう？ だから、これを飲んだあとは温かいお湯に浸かつて当ホテル自慢のダイニングを楽しんで、ゆつくり休んだほうがいい。あと、それから

僕の心の平穏のためにもミラノを案内させてほしい」

ここまで至れり尽くせりしてもらって、本当にいいのかしら？

「いい子だね、ゆつくりおやすみ」

ガイドブックを渡してくる彼に^けお^{うなず}されるように頷くと、そう言つて、私の頭を撫でて彼は部屋を出て行つた。

誰もいなくなつてしまふと静まり返つた部屋で、彼が淹してくれたミルクティーに口をつける。深いコクとやさしい香りが私を包んで、ホッと息を吐いた。

まあ私一人だと、また何か失くしそうだし迷子になりそうだから、任せたほうが安心なのかしら。それに現地の方に案内してもらつたほうが、色々と楽しめそう。

そうは思つても、迷惑をかけてしまつたら申し訳ないわ。

「……」

私はどうしたらいいのだろうと思ひながら、ミルクティーを飲みきり、ふかふかのベッドに大の字で寝転がつた。すると、疲れからか急速に眠気が襲つてくる。

私つたらお風呂に入らなきやいけないので……。テオさんもお風呂に入りなさいって

諦めるために逃げたのに、お腹の子ごと溺愛されています

言つてた。それに夕食もまだなのに……。でも今日は色々あつて疲れちゃつたから、食事やお風呂は朝でも大丈夫よね。

私は言い訳をしながらも、襲つてくる眠気に従い、目を閉じた。

「ん、よく寝た」

私はカーテンを開けて朝日を浴びながら、伸びをした。

昨日は夕食も食べずに早々に寝てしまつたせいか、今朝は早く目が覚めた。そのおかげで、ゆつくりとお風呂に入れて気分爽快なので、早く寝て良かつたのかもしれない。そしてメイクをしながら、昨夜テオさんから出された宿題をするためにガイドブックを開く。

ミラノつて、有名なのはやっぱりミラノコレクションよね。だから、古代の遺跡や中世の街並みというよりは、モードやデザインの発信地つてイメージが大きい気がするわ。……ということはやっぱりハイブランドのブティックとかが多いのかしら。

私はそういうものには興味がないので、買い物より観光を中心したい。行き当たりばつたりの一人旅をするつもりだったから、黄金のマリア像があるミラノ大聖堂以外は

どこに行こうか、まだ考えていなかつたのよね。

えっと。ミラノ大聖堂は絶対でしょ。あとは、教会にあるという『最後の晚餐』を見たいかも。

「あ、『最後の晚餐』は予約制なのか」

じゃあ、今日は無理ね。

独り言ちながら、ガイドブックとにらめっこをしているとノックが聞こえた。その音に顔を上げる。

あら、テオさんかしら？

「ミーナ、おはよう。早起きだね。よく眠れたかい？」

「おはようございます、テオさん。はい、おかげさまで。朝までぐっすりでした」

「昨夜は当ホテル自慢のダイニングを楽しむなかつたと聞いたけど、まさかあのあとからずっと眠っていたのかい？」

扉を開けると、案の定テオさんがにこやかに立つていた。挨拶を交わしながら招き入れると、彼は今日の新聞をテーブルに置き、モーニングティーを淹れる準備を始めてくる。そんな彼を見ながら、えへへと笑つた。

「安心したら気が抜けてしまつて……」

いよ。じゃあ、ミーナは今とてもお腹が空いているだろう？ 朝食会場には、フレッシュユージュースもあるし、ミーナが好みそうなパンやペイストリーもあるから、これを飲んだけら行つてくるといい」

「はい、そうします」

「頷くと、彼がいい子だねとウインクしてくれる。

とても細やかに世話を焼いてくれる彼の姿に、私の胸がトクンと高鳴った。胸の高鳴りに動搖して、はたと動きを止める。

ちよつと私つたら……。でもこれはテオさんが素敵だから……。

自分の気持ちに言い訳をしても、私の胸はドキドキとけたまましい。

ついこの間失恋したばかりで、もう恋なんてこりごりだと思つていたのに、旅先で素敵な男性に出会つたからつてときめくなんてダメだわ。彼は親切なだけ！ 変な勘違いはいけないわ、美奈！

このまま好きになつてしまふのは絶対にダメだ。これでは元カレのことを節操なしと言えなくなる。

気をしつかり持つのよ、私！

私はティーカップをガシッと掴んで、浮ついた心を落ち着かせるためにモーニングティーを一気に飲み干した。それを見たテオさんが目を見開く。

私はティーカップをガシッと掴んで、浮ついた心を落ち着かせるためにモーニング

「ミーナ!? そんなに急いで飲むと火傷しちゃうよ。大丈夫?」

「は、はい。そんなに熱くなかったので大丈夫です」

「……ミーナはなんとなく猫舌そっだから、温度には気をつけたんだ。それでも急いで飲むのはよくないよ」

テオさんは「良かった。飲みごろにしておいて」と胸を撫で下ろしている。でも、私は猫舌とバレていることに正直驚きが隠せない。私はテオさんの言葉に目を丸くした。わざわざ伝えていないことまで、先読みして動いてくれるのはさすがとしか言いようがない。

バトラーってすごい……！」

「さあ、早く朝食を食べておいで。ただし、朝食はさつきみたいに急いで食べちゃダメだよ」

私が感心していると、彼はティーカップを片づけながら、揶揄うように笑う。

「はい。ゆっくり食べます……」

「そうしてくれると助かるよ。あと、ミーナ。観光に出かけている間にルームメイドを入れてもいいかい？」

「もちろんです。よろしくお願ひします」

「了解」

テオさんに朝食会場まで案内してもらひながら、そう答えると、彼はウインクをして承諾してくれる。たつたそれだけなのに、また私の胸はトクントクンと高鳴ってしまう。本当にどうしちやつたのよ？ 私つてば……

彼はイケメンだし、とても優しく気遣いにあふれている。だからって、旅先で会つただけの人を本気で好きになつてどうするつもり？ そんなの……あとで絶対つらくなるだけだわ。

私は自分の心に戸惑いながら、テオさんと朝食会場の前で別れた。

「うう、お腹がいっぱいで苦しい……」

「ミーナ、良かつた。たくさん食べられたようだね」

「はい。どれもとても美味しくて、選べませんでした」

私が好みそうなパンやペイストリーがあるとは言われていたけど、本当に好きなものがたくさんあって、ついつい食べ過ぎてしまつたのだ。

昨日夕食を食べていないからって欲張りすぎたわ。恥ずかしい……。食いしんぼうだと思われたらどうしよう。

私は頬を赤らめながら、いっぱいになつたお腹をさすつた。すると、テオさんが昨日と同じ運転手つきの高級車へスマートに乗せてくれる。

「さて、どこに行くか決めた？」

「はい。まずは定番のミラノ大聖堂に行ってみたいです」

「それはいい。大聖堂はミラノの象徴的存在でもあるし、聖母マリアに捧げられた世界最大級のゴシック建築もあるんだ。それを一番に選ぶ君は素晴らしいよ」

「そ、そうですか？」

事あるごとに褒めてくれる彼の言葉に面映ゆい気持ちになつて、私は誤魔化すように笑つた。そして、視線をガイドブックに落とす。

女性を褒めるのはイタリア人男性の礼儀だと聞いたことがあるけど、本当に彼は息をするように私を褒めてくれる。この褒め言葉攻撃に慣れないので、ついつい反応してしまう。私は小さくかぶりを振つた。

このままずっと彼にお姫様のように扱わっていたら、本当に好きになつてしまいそうだ。彼には何でもないことなのよ。勘違いは絶対にダメ。それに恋はもういいつて決めたじゃない。でも……彼が恋人だったら毎日が幸せであふれていそう。

……テオさんみたいな人が恋人だつたら良かったのに……

私は俯きながら視線だけで彼を盗み見た。

「わあ！」

大聖堂に着くと、ドゥオーモ広場に面して堂々と聳え立つてある建築物の正面に目を奪われた。白大理石と彫刻が美しい。

「素晴らしいですね」

「この彫刻はね、聖書の人物や聖人、預言者など、全体で約三千五百体あるんだよ。特に『テラモン』という男性の像を探してごらん。他の装飾や柱を支える役割も兼ねているから、色々な所にいるよ」

そう言って、彼が指を差す方向に視線を向ける。

確かに色々なポーズで柱を支えていて、とても遊び心があつて面白い。

このテラモンさんは何体いるのかしら?

テオさんの解説を聞きながら興味深く見ていると、扉が五つあることに気づく。

「テオさん。扉がたくさんあります、どこから中に入ればいいんですか?」

「入場口は一番右の扉だよ。でも、その前に中央扉を見よう。五つの扉の中で一番大き

いんだ」

彼はイタリアの有名な彫刻家が手掛けたレリーフがあると教えてくれた。花や果物、動物をモチーフにして聖母マリアの生涯が彫られているらしい。

「扉に向かって左側中央のレリーフが表現しているのは、天に召されたキリストを後ろで支える聖母マリアの姿だ。そして右側中央は、彼女の有名なエピソードの一つ『聖母マリアの被昇天』が彫られているよ」

「すごい……」

口を大きく開けたまま、テオさんの説明を聞きながら、そのとても大きな扉のレリーフを見つめる。もう全部が素晴らしいとしか言葉が出てこない。

私がスマートフォンを取り出し、パシャリと写真を一枚撮ると、テオさんが私の手からスマートフォンを取った。

「あ！」

もしかして撮っちゃいけない場所だったのかしら。私つたら……

やってしまつたという顔をした途端、彼が微笑みながら首を横に振つた。

「ほら、遠慮しないで。少し後ろに下がろうか」戸惑いつつも言われたとおりに後ろに下がって、中央扉の前に立つ。髪を手櫛てくしでさつと整え、テオさんに向かってニコッと微笑んだ。

「じゃあ、撮るよ」

「そう声をかけて、彼が二、三枚シャッターを切ってくれる。

「これで大丈夫？ 可愛く撮れたと思うんだけど」

「はい。ありがとうございます」

スマートフォンの画面を見せてくれる彼と思わず体が触れ合って、胸がドキンと跳ねた。ほのかな甘さと男性的なセクシーな香りに、なぜかは分からぬけど、ゾクゾクしてしまった。

私ったら……！

「つ、次はテオさんと一緒に撮りたいです！」

「喜んで、ミーナ」

上擦うわすつた声で、この勢いに乗つて図々しいお願いをしてみる。彼が快諾してくれたのでどさくさ紛れにテオさん一人の写真もゲットし、ご満悦でスマートフォンを抱き締めた。

嬉しい！ いい思い出になつたわ！

「テオさんが撮つてくれた写真、とても綺麗に写つていてびっくりしました。写真撮るのお上手なんですね」「ノー。僕が上手なんじゃなくて、被写体がいいんだよ。ミーナはとても可愛く美しい。だから、綺麗に写るのは当たり前のことだ」

「（～～～つ！）

頬を撫でながらそう言われて、全身の血液が頬に集まつたんじやないかと思うくらい、彼が触れている場所が熱をもつ。彼の態度に、自分がとても大切にされている錯覚に陥つてしまつ。勘違いしちゃいけないのに、勘違いしそうになる。私は慌てて触れられていないほうの頬をパシーンと叩いた。それを見たテオさんがすごく驚いている。

「ミーナ？ 急にどうしたんだい？」

「いいえ。ちょっと弱い自分の心と闘うために気合を入れようと思いまして……」

どうやら私の心は失恋を新しい恋で癒いやそうと思つてているらしい。でも、テオさんと私はこの旅行中だけの関係だ。本気で好きになつても実らない。それにそんなの親切なテオさんにも迷惑がかかつちゃうわ。いいかげんフラフラしてないで、純粹に旅行を楽しまなきや！」

私の言葉にテオさんは訝しげな表情で首を傾げている。

「ほら、早く中に入りましょう」

そんな彼に誤魔化すように笑って、私は手を引いた。

「違うよ。こっち」

「……え？」

先ほどテオさんが言つた一番右の扉に並ぼうとすると、彼は私の腰に手を添えて体の向きを変える。そして、入場口には目もくれずに歩き出した。

え？ 入らないの？

私の手を引いて歩き出すテオさんに、顔を後ろに向けながら離れていく入場口を見つめた。

「あの、テオさん？ ついさっき一番右の扉が入場口だつて言いませんでしたか？」

「うん、言つたよ。でも見て分かるとおり、とても混雑しているから、屋上テラス行きの入場口から入つたほうが早いんだ」

へえ、そうなんだ。私一人だつたら、そこに並んでいたかもと思いながら、空いている手でガイドブックを開く。あ、本當だ。屋上テラス行きのほうがおすすめって書いてある。エレベーターか階段か選べるのね。テオさんの後ろを歩きながらガイドブックを確認していると、突然彼が立ち止まつたので、背中にぶつかってしまう。

「すまない、大丈夫かい？」

鼻を押さえながら俯くと、慌てた彼が振り返つて私の顔を覗き込む。

「大丈夫です。ごめんなさい、ガイドブックを見ながら歩いていた私が悪いです」

「いや、気をつけていなかつた僕が悪い。ちょっと見せて」

「……っ！」

テオさんが私の頬に手を添えて、ぶつけたところを確認する。彼の吐息を感じてしまふくらい近くに顔が近づいてきて、私は思わず息を止めた。

その時、数人のスタッフらしき人が近づいてくる。そしてテオさんに恭しく頭を下げた。

「……え？ どういうこと？」

「お待ちしておりました、ミネルヴィーノ様。こちらからどうぞ」

「ありがとう」

「……」

「あ……そんなんですね」

私の戸惑いが分かったのか、テオさんがウインクをしてそっう教えてくれた。

さすが五つ星ホテルだ。ホテルで予約を取つてもらうと、優先的に入場ができるのね。

私が感激している間にも、彼はスタッフの方とにこやかに話しながらセキュリティチエツクを受けて、ゲートを通る。

「でもいいんでしようか？ 特別扱いしてもらつたみたいで申し訳ないです……」

「別に構わないよ。もともと、屋上テラス行には優先入場口と一般入場口があるんだ。だから、これは珍しいことじやない」

でも——多分ホテルからの予約だから、誰よりも優先的に通れたのだと思う。テオさんは珍しいことじやないと言うけれど、おそらく珍しいケースだろう。

エレベーターに乗りながら、大丈夫と笑う彼をじつとりと見つめた。そして次の瞬間、ハツとする。

私、チケット代払つてない！

「テオさん、ごめんなさい。チケット、おいくらでしたか？」

「ん？ いらないよ。僕が提案したんだから費用のことは気にしなくていいって言つただろう」

「でも……。ホテル代を出していくだいているのに……」

「ミーナ。君は遠慮なんてせずに、目一杯楽しめばいい」

私がお財布を出すと、彼はクールに笑いながら首を横に振る。そして私の頭をポンボンと撫でた。

でもそんな……。とても申し訳ない。

テオさんは私をお人好しと言うけど、テオさんのほうが余程お人好しだと思う。出会つたばかりの私を助けてくれ、こうやつて観光に連れていくてくれるんだもの。災い転じて福となすとは言うが、こんなにも幸せでいいのだろうか。私、一生分の運をここで使い切つてない！

ああでも、それでもいい。これから先良いことなんてなくとも、この思い出を胸に楽しく生きていけそうだ。そんなことを考えていると、エレベーターが屋上に着いた。

「ミーナ。ほら、着いたよ。楽しもう」「はい」

笑顔の彼に手を引かれて屋上に出ると、一本の道が伸びていた。
わあ！ ゆうい！

美しい彫刻が視界に飛び込んできて、私は思わず感嘆の息を吐く。デザインが違う上に少し遊び心が加えられていて、とても興味深い。それに、何より景観が素晴らしい。「とてもいい景色ですね。ミラノの街並みがよく見えます」

「気に入つてもらえて嬉しいよ」

テオさんが嬉しそうに微笑みながら私の腕を差し出したので、その腕に自分の手を絡めた。彼の腕を取りながら、屋上からミラノの街を眺めていると、なんだか心が浮き立つてしまう。

まるでデートをしているみたい。そこまで考えて、私はかぶりを振った。

「ミーナ？」

「テオさん！ こっちへ行くとテラスなんですよね？ 早く行きましょう！」

私の顔を覗き込む彼の視線を振り払うように、私は掴んでいる彼の腕をぐいぐい引っ張る。そして順路と標識に従い、テラスへ向かった。すると、無数の尖塔が並ぶ庄園の光景に目を奪われる。

「この尖塔は全部で百三十五本あるんだ。尖塔上部にいる画像はすべて違うデザインなんだよ」

「それはすごいですね」

すべての画像が、まるで外敵から大聖堂を守るように外側を向いている。そのままに圧倒された。

この素晴らしい光景を見ていると自分がちっぽけなものに感じられ、簡単なことでテ

オさんに揺れている自分が恥ずかしくなる。このあとは気をしっかりともつて、テオさんの優しさを誤解しないようにしなきや。

私は両方の拳を握りしめ、決意を新たにした。

「ねえ、ミーナ……」

「ひやあっ!?」

私が尖塔の画像を見ていると、突然耳にテオさんの息がかかる。その吐息にゾクゾクしたものが体を走って飛び上がつてしまつた。

私、今変な声出しちゃつた……！

とつさに自分の口を手で覆う私を見て、テオさんはとても驚いた顔をして、両手を上げた。

「……ミーナ、すまない。驚かせてしまったかな」

「ご、ごめんなさい。違うんです。尖塔になつてしまつていて……」

その上、今までの注目を集めてしまつたのか、周囲の視線が痛い。私が俯くと、彼が私を皆の視線から守るように腕の中に隠してくれた。

「いや、僕のほうこそ驚かせてしまつてしまない。外観の装飾の中でも、一際面白いのがガーゴイルと呼ばれる排水口なんだと言いたかつたんだ。天使や空想上の動物をモチーフにしているんだよ」

「そ、そ、うなんですね！ わあ、す、ごい！」

落ち着くのよ、私。お願ひだから落ち着いて、私の心臓。

ガーゴイルを覗き込もうとするとき、テオさんは抱きしめている腕に力を込める。そして困ったような声を出した。

「ま、いたな。ミーナ、可愛すぎだよ。耳まで真っ赤にして……。そんなに可愛い反應をされると、困ってしまうんだけど」

「……え？」

顔を上にあげると、彼は頬を赤らめて片手で口元を隠していた。その表情に目を見張る。……テオさん？

彼のその表情に硬直していると、彼が突然私の鼻をぎゅむつと摘んだ。

「……つ！」

「ミーナ。そんな可愛い顔で見つめられたら、思わずキスしちゃうよ」

「……つ！」

えつ？ キス!? キスって言った？

「冗談だよ」

口をパクパクさせると、彼は意地の悪い笑みを浮かべて、私の額を指で弾く。私は額を押さえて、彼を睨んだ。

「ほら、あの大尖塔を飾るのがこの大聖堂のシンボルだよ。ミーナも聖母の如き心で、今僕を許してほしいな」

あれがガードブックに載っていた黄金の聖母マリア像……！
うう、揶揄うなんて酷い。
「テオさんなんて、もう知りません」

「怒らないで、ミーナ」

ぶいつと顔を背けて一人で歩き出すと、テオさんがそう言いながら追いかけてくる。その声に立ち止まって頬を膨らませながら振り返ると、彼は手を伸ばして何かを指した。「ほら、あの大尖塔を飾るのがこの大聖堂のシンボルだよ。ミーナも聖母の如き心で、今僕を許してほしいな」

マリア様。私、出会って間もないのにテオさんに惹かれています。こんな私は節操なしでしょうか？ 私が気をしつかり持てるように、どうか見守っていてください。胸の前で手を組み、懺悔と懇願が入り混じった訳の分からぬ祈りを捧げる。すると、テオさんも隣で私を真似て手を組み、こう言つた。

「ミーナがイタリアを好きになつてくれますように」「テオさん……！」

「僕は君がこの旅を楽しめるように最善を尽くすと誓うよ。だから、もう怒らないで」「最初から怒つてなんていません……」

困ったようにそう言うと、彼がとても嬉しそうに笑う。その笑顔にまたもや心臓が大きく跳ねた。ブワッと体温が上がつて、熱くなる。

マリア様、ごめんなさい！ 私、無理かもしません。これ以上テオさんのかつこよさに抗えそうにありません！

私は黄金のマリア像を見つめながら心の中で悲鳴を上げた。

「ミーナ。足元に気をつけてね」

「ありがとうございます」

そのあとはテオさんにエスコートされながら、ひたすら階段を下りた。

下りる時はエレベーターがないので少し大変だ。でも彼と手を繋いで下りられるのが楽しくて、全然苦にならない。テオさんの気遣いにニコリと返しながら、ハアッと歓喜の溜息を吐く。

「それにしても外観も屋上も、とても素晴らしいかったです。まだ中を見ていのなんて

嘘みたいに大満足です」

「そうだね。この大聖堂は完成まで五百年近い歳月が費やされ、多くの芸術家たちの想いと技術の粹^{すい}が集まっている。それだけ素晴らしいことかな」

彼の言葉にふむふむと頷く。

建設に、そんなに長い時間がかけられているのね。当たり前だけど、当時は機械なんかないからすべてが人の手で造られているのよね。そう思うと、本当にすごい。

階段を下りきって、その先にある扉をテオさんが開けてくれる。その扉を抜けると果然と並ぶ巨大な柱と厳^{おごそ}かな雰囲氣に心が大きく揺さぶられた。テオさんから話を聞いたからだろうか。気が遠くなるくらい長い歳月、彼らが懸けた想いが伝わってくるようだつた。

聖堂の右側——南面のステンドグラスから差し込む明かりもなんだか嚴^{おごそ}かに感じる。それに立ち並ぶ巨大な石柱が、華やかな外観とは異なり、莊嚴かつ敬虔^{けいけん}な空気を演出していた。

「テオさん！ 早く中を見て回りましょう！」

弾^{はず}む気持ちが抑えられなくて、テオさんの手をぐいぐい引っ張つて、ラテン十字型の大聖堂の中を進む。すると、彼は入つてすぐ右手側にある——かつてミラノの支配者であつた大司教の十字架と石棺^{せつか}の前に私を案内してくれた。